つた日新館で学ぶようになっていましたが、それは、武士の男の子に限られていました。女子は、「女には学問はいらない、むしろ害毒になる。」といわれて、母から娘へと伝えられる家庭での教えしかうけられませんでした。

リンは、男女は平等であり、女子は家にあってよい妻として、またかしこい母として生きていくためには、女子こそ学問をしなければならないのだという理想をかかげ、女学校をどうしてもつくらなければならないと考えたのです。

明治二十六年（一八九三年）七月十二日、最初の女学校は、幼稚園のかたすみで、裁縫の裁ち板と、物さしと、はさみだけで始められました。生徒はわずか四名でした。

しかし、幼稚園にもまして、女学校の経営には困ったことがたくさんありました。女学校の先生として教えることのできるような人は、そのころはあまりいませんでした。また、資金も自分たちで用意するしかありませんでした。